



統計重視の改革 将軍吉宗と町奉行大岡忠相

作家 童 門 冬 二

江戸の人口統計

八代将軍徳川吉宗は、「享保の改革」をおこなったが、かれの改革に対する態度は非常に科学的だったといっている。なによりも統計を重んじた。そして吉宗が登用した江戸町奉行大岡忠相も吉宗に学んで統計を大切にした。吉宗は「米将軍」と呼ばれたが、その由来はもともと日本の人口の少子化傾向にあった。吉宗が統計担当の役人を呼んで日本の総人口を報告させたところ、推計ではあるが約二千数百万という数字が出た。そしてその数字は数年来あまり変わっていない。吉宗は「なぜ人口の増減が少ないのか?」ときくと役人は「農村における間引きのせいでございます」と答えた。間引きというのは、生まれた赤ん坊が将来労働力にならないと知ると、農民は赤ん坊の鼻に濡れた鼻紙を当ててあの世へ送り返してしまう。人為的な人口減だ。吉宗は怒った。「この世に生まれた生命の尊さは、たとえ将来労働力にならなくても変わりはない。なんという非人間的なことをするのだ。すぐやめさせろ」と怒った。しかし役人は「労働力にならない赤ん坊を養うのには農村での食糧が足りません」と答えた。そこで吉宗は「農村における米の増反をおこなえ。そのためには新田を開発し、灌漑用水を引いて、さらに農業技術をもっと科学化しろ」と命じた。吉宗はこの増反政策をさらに拡大して、日本にない動植物を輸入させ、さらに科学書や機械類も輸入させた。吉宗自身、

あまり読書家ではないが科学が好きだった。そこで自分のために、天体望遠鏡や雨量計測計などを輸入させた。そして夜になると天体観測に夢中になり、新しい星を発見してはよろこんだりした。また大雨のときに、雨量計測計の針がピンピンはねると、

「こんな状況では、きっと利根川は氾濫する。すぐ防護措置を講ぜよ」といって、洪水防止の指示を出したりした。

そのもとで江戸市政をつかさどる大岡も、統計を重んじた。享保十(1725)年に、大岡は江戸の町年寄に人口調査を命じた。このとき出されたのが、4月 462,102人・男 301,125人・女 160,977人 6月 472,496人・男 301,920人・女 170,576人となっていた。大岡は不思議に思った。それは男性のほうの数は4月と6月で大した差はないが、女性のほうが6月になると1万人近く増えていたからである。関係役人に理由をただした。すると役人は、

- ・4月までは、江戸の冬場の火事が多いので、女性を郊外へ疎開させていたこと
- ・夏場になると江戸の火事が少なくなるので、疎開させていた女性を呼び戻したのでその数が増えたこと

これをきいた大岡は、今度は冬場における火事の統計と、夏場における火事の統計を調べさせた。たしかに冬場が多く、夏場は少ない。これを基に、大岡はさらに、「なぜ、江戸で火事が多いのか?」

ということを徹底的に調査した。主な原因はなによりも家屋が木造であることだ。それに、屋根が茅葺き・板葺きが多いことである。さらに一旦火が出ると、類焼のスピードが早く次々と火が移っていく。これは、
「火除地がないためだ」と大岡は判断した。

江戸の不燃化対策

そうなると、江戸を、
「燃えにくい不燃都市にするには、どうしたらよいか」と考える。木造家屋をいまのように鉄筋コンクリートにするわけにはいかない。しかし、燃えやすい屋根を不燃化することはできる。そこで大岡が考えたのは屋根を、

- ・瓦葺にする
- ・土塗り(塗屋)にする

などである。さらに、たとえば焼失した大きな寺の跡を没収し、二度と再建させずに、そこを火除地にしてしまうことである。この例に、護持院ヶ原がある。仇討ちで有名なこの原っぱも、元は護持院という寺があってその焼跡を火除地にしたものだ。しかしこれはなかなかスムーズにはいかなかった。たとえば、大岡が町年寄たちに、「町屋の屋根を瓦葺にしたらどうか」と相談すると、町名主たちは、

- ・瓦葺にすれば、たしかに飛び火もすくなくなります。そのためには下の家屋の柱や棟の木などをいまより太く大きなものを使わざるを得ません。これはいまの江戸の町人たちの経済力ではとてもできません

と答えた。いまでいえば「総論賛成・各論反対」ということである。しかし大岡は諦めなかった。そこで次に、

「瓦がダメなら、土塗りにしたらどうだ?」と相談した。するとこれに対しても町名主たちは、「いまの町屋は骨組みが弱いので、漆喰や土塗りに耐え

切れません。第{k}喰にしても、一年ぐらいしか持ちません。毎年塗り替えていけば、原料の土や石灰も値が張ります。江戸市中で一度にそんなことをすれば、土や石灰を扱う商人たちが一挙に値を上げるでしょう。適当ではありません」と応じた。これも、

「総論賛成・各論反対」である。

しかし大岡は粘り強かった。かれは江戸っ子の気質をよく知っていたから、

「頭から押さえつければ必ず反発する」と思っていた。そのために"一步後退二歩前進"という方法以外、この"反権力的思考"の強い江戸市民を統制していくのはムリだと思った。ぐっと堪え、
「おまえたちのいうことにはもっともなところもある。しかし、わしはなんとしても江戸を燃えない町に変えたいのだ。いい対案があったら示して欲しい」

と柔軟な態度に出た。そこまでいわれると町年寄たちもただ反対すればいいというわけにはいかない。みんなで相談した。代表がやってきて、

「瓦や土塗りの代わりに、江戸の海岸に落ちているカキの貝殻を屋根にのせたらいかがでしょうか」と申し出た。大岡は賛成した。このとき大岡は、

「カキの殻を屋根にのせるにしても、ただのせただけではダメだ。すぐ落ちてしまう。カキの殻の下に、薄く土塗りをするように」

と命じた。こういう柔軟で根気強い大岡の態度は、しだいに町年寄や市民のきもちを変えていった。

「大岡奉行さまは、誠実な方だ。われわれもただ反対ばかりしてはダメだ。やはり義務を果たさなければならない。できることはやるべきだ」というように考えが変わっていった。この考えの変化が、いままでまったくなかった"町火消いろは四十八組"の結成に発展していく。